

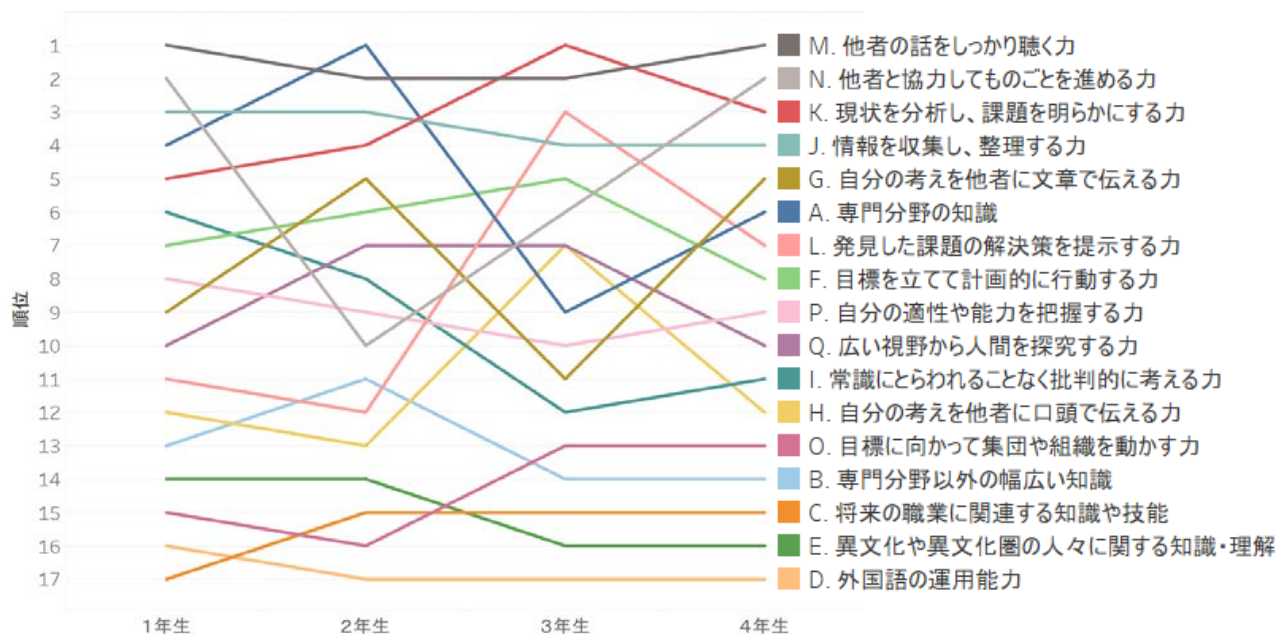
## 第2章 在学生調査と GPA

### 1. 分析の目的

在学生調査は、学生一人一人が毎年度の活動や成長を振り返る機会を提供することを主たる目的としているが、大学にとっては、教育の内部質保証サイクルを機能させる議論のための貴重なデータを得られる調査でもある。本章においては、前章の全体集計を前提としながら、一步踏み込んだ分析を試みたい。

まず、学生の学修実感が学年によって異なるかを確認してみる。在学生調査では、年度末時点の知識・能力の学修実感を、全学年共通の設問で尋ねている。学年別の平均値によって項目を順位化することにより、それぞれの学年でどのような知識・能力が身についたと感じられやすいのかを以下に図示する。

図 1-1 知識・能力の学修実感の順位変動



グラフを見ると、学年に関わらず上位に位置する能力として、「M. 他者の話をしっかり聴く力」や「K. 現状を分析し、課題を明らかにする力」が挙げられる。下位に位置しやすい能力としては、「D. 外国語の運用能力」や「E. 異文化や異文化圏の人々に関する知識・理解」がある。こういった傾向については他大学との違いはあるのだろうか。日本私立大学連盟が刊行する「私立大学学生生活白書 2018」<sup>1</sup>の中で「身についたと実感できる力」として一部同様の内容を尋ねており、これとの比較を試みる。本学の上位項目と同様の能力は項目としては見当たらず、下位の項目と同様の項目として「外国語の本を読んだり、外

<sup>1</sup> <https://www.shidairen.or.jp/files/user/4372.pdf> (関連するページは p. 81)

国語で話をする力」や「留学体験や留学生との交流等による異文化理解力」があり、外国語や異文化理解に関しては本学に限らず、私立大学に共通して実感を得られにくい状況にある可能性が指摘できる。

学年によって順位の変動が大きい項目として、「A. 専門分野の知識」や「L. 発見した課題の解決策を提示する力」が挙げられる。こういった変動は、各学科のカリキュラムや、学生の課外活動等の経験の違いによることが考えられるものの、現状では全学年を通じて学科ごとに検討ができるほど回答が回収できていない。本年度はその違いについては言及できないが、引き続き、アンケートの回答率を高めるための施策を行っていく。参考として、学科・学年別の回答人数を以下に示す。

表 1-1 学科・学年別の回答人数

	1 年生	2 年生	3 年生	4 年生
法学科	9	9	5	6
政治学科	17	6	1	7
経済学科	11	11	2	6
経営学科	18	7	4	8
哲学科	6	5		3
史学科	8	1	8	5
日本語日本文学科	20	4	4	2
英語英米文化学科	8	7	1	2
ドイツ語圏文化学科	2	2	1	1
フランス語圏文化学科	7	3	2	2
心理学科	11	7	4	2
教育学科	4	1		
物理学科	3		1	2
化学科	4	2	1	1
数学科	8	2	3	
生命科学科	3	2		3
国際社会科学科	7	5	3	

このように、身についた実感の得られやすい項目やそうでない項目は見えてきたが、学科ごとの違いや学生の経験による違いの検討は難しい。前年度は、様々な活動への取り組み意欲の程度によって回答を類型化し、この類型による学び方や学修実感等の違いを確認した<sup>2</sup>。今年度は、他大学で行われている在学生対象調査の分析例<sup>3</sup>も参考に、GPA（2018年度の期間 GPA）と在学生調査の回答の関連性を検討した。これにより、GPAの高低とつながりのある各種活動や、GPAと学修実感の連動性などについて見ていきたい。

<sup>2</sup> [https://www.univ.gakushuin.ac.jp/about/enq\\_students\\_2017-2.pdf](https://www.univ.gakushuin.ac.jp/about/enq_students_2017-2.pdf)

<sup>3</sup> 例えば、[https://crdeg5.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/ir\\_kyo4.html](https://crdeg5.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/ir_kyo4.html) など

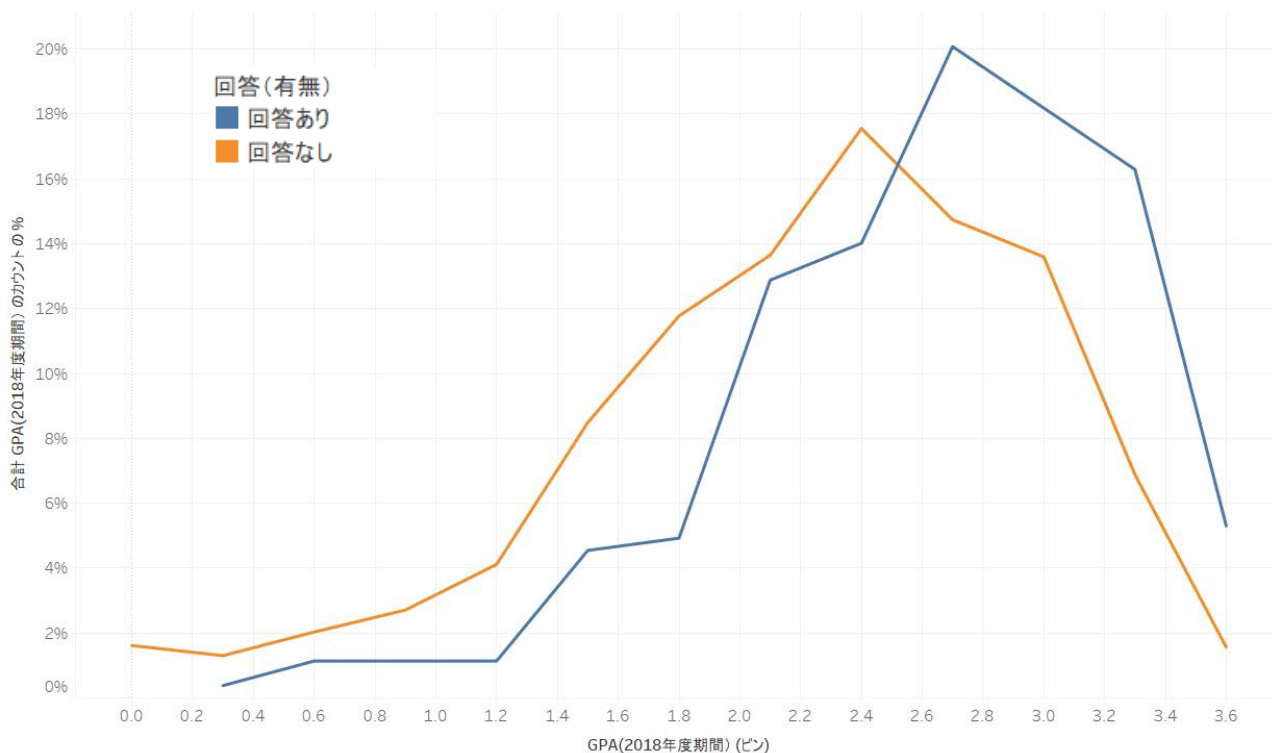
## 2. 在学生調査と GPA の連結

### 2-1. 在学生調査に回答した学生の特徴

本ページ以降では、回答した人数が最も多く、また全ての学科の学生が回答している1年生に絞って、2018年度の期間 GPA と在学生調査の関連性を検討していく。

在学生調査に回答した学生の GPA の分布と、回答しなかった学生の GPA の分布を比較すると、回答した学生の方が GPA が高いほうに偏ることがわかった。GPA の平均値では、回答した学生は 2.89 であり、回答しなかった学生は 2.39 であった。これ以降の分析を見ていくにあたって、今回の分析は比較的成績の良い学生の結果であることを留意する必要がある。

図 2-1-1 在学生調査回答の有無による GPA の分布の違い (2018 年度 1 年生)



## 2-2. 回答した学生の学習時間等

GPA とのつながりを検討する前に、全体的な平均に基づいて本調査の結果を検討したい。まず、表 2-2-1 に、GPA、登録単位（資格課程を含む）、修得単位（資格課程を含む）と、本調査の Q06 と Q07 で尋ねた 1 週間あたりの出席・学習・生活時間についてまとめる。

表 2-2-1 2018 年度 1 年生の GPA・登録修得単位・各種時間（1 週間あたり）の平均値

	全学平均
人数	146
GPA	2.90
登録単位数(教職等を含む)	49.20
修得単位数(教職等を含む)	47.80
登校日数	5.40
出席時間(合計)	18.90
授業外学習時間(合計)	9.80
課外活動(合計)	6.10
個人学習時間(合計)	3.70
アルバイト時間	10.70
交友・趣味・娯楽	8.80
インターネットの閲覧	11.70
大学への通学時間	9.70
私的な生活時間	18.30
睡眠時間	44.00

0 時間は平均の計算から除外

まず、授業への出席時間と登録・修得単位との関連を検討する。出席時間の平均は 18.90 時間であり、この平均値から推定する履修単位は 50.4 単位となる。実際の平均単位数は登録単位 49.20、修得単位 47.80 であり、おおよそ一致した。このことから、本調査の時間の回答に関して、概ね信頼性のある回答であると言えそうである。

授業への出席時間について、他大の調査例を見てみると、実施年度や調査方法等が異なるため注意が必要だが、例えばお茶の水女子大学の 2016 年度の調査では 1 日あたり 273 分と報告されており<sup>4</sup>、週 5 日換算で約 23 時間と本学よりも長い。お茶の水女子大学は CAP 制を設けていないことから、本学よりも年間の単位数が多く履修された結果であると思われる。

授業外学習時間（履修科目に関する授業時間外の学習）についてみると、本学においては 9.80 時間で、お茶の水女子大学の調査では 1 日あたり 66 分<sup>5</sup>、週 5 日換算で約 5.5 時間であった。本学の学修時間は比較的長い方と思われる。

<sup>4</sup> <https://crdeg5.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/ir16kyo1.html>

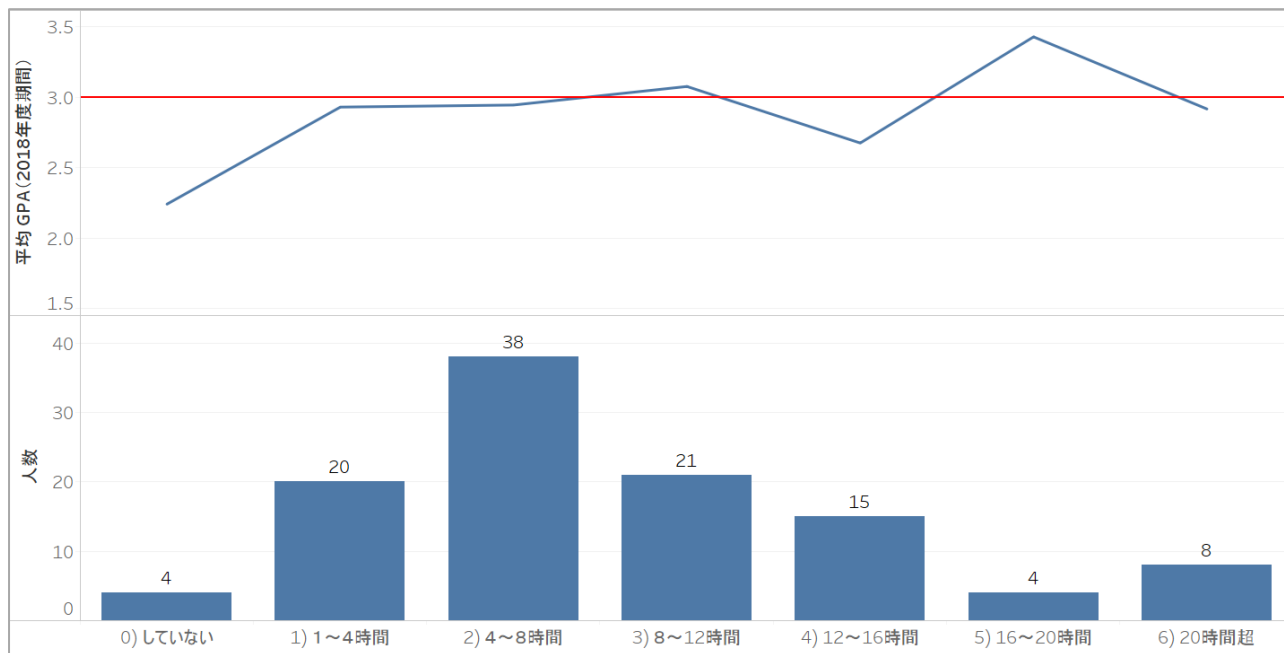
<sup>5</sup> <https://crdeg5.cf.ocha.ac.jp/crdeSite/ir16kyo2.html>

また、お茶の水女子大学の同調査報告では、単位制度の実質化の程度を見る指標として、授業外学習時間について授業時間の2倍を基準として充足率を算出している。参考に本学で同様の計算をすると  $9.80 / (18.90 \times 2)$  で約25.9%となり、お茶の水女子大学の報告(12.1%)に比較すると多いものの、充足率として高いとはいえなかった。

### 2-3. 授業外学習時間と GPA

全体的な傾向として、授業外学習時間と GPA はどういった関係にあるのかを図 2-3-1 にまとめた。

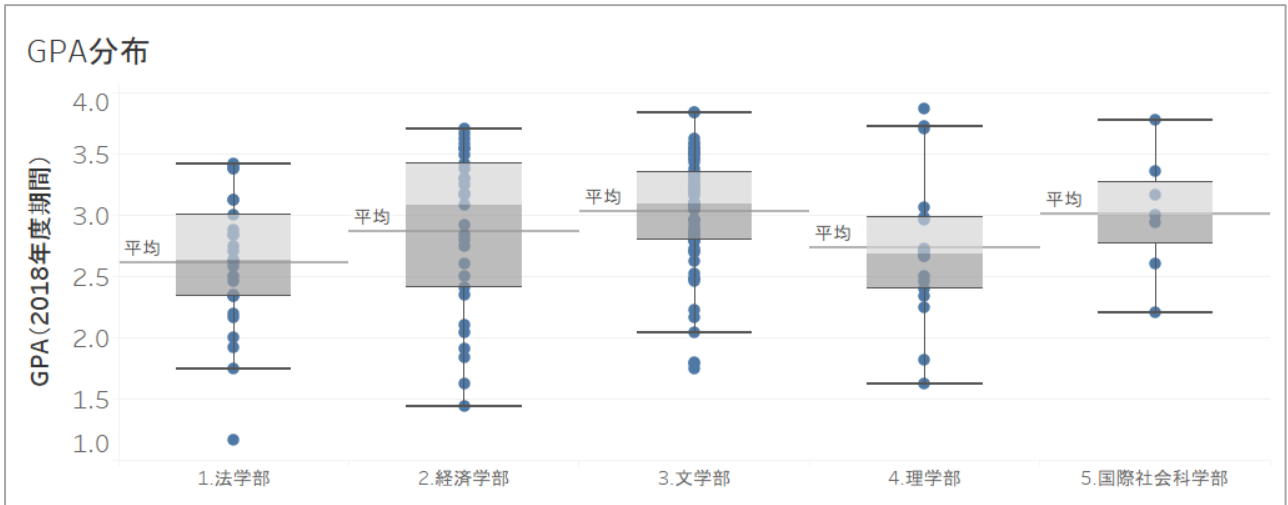
図 2-3-1 授業外学習時間と GPA



グラフは授業外学習時間を4時間で区切った場合の平均 GPA と含まれる人数を示している。まず、「していない」(授業外学習時間の合計が0時間だった)学生の GPA は他と比較して低く、これは当然のことと思われた。最も人数が多いのは、「4~8時間」(4時間より多く8時間以下を示す)であるが、GPA はその次の「8~12時間」のほうが若干ではあるが高くなり、ここで平均 GPA が3.0を超えている。しかし、「12~16時間」では平均 GPA は下がり、さらに長くなる「16~20時間」では高まっている。

総じて、授業外学習時間が長くなると GPA も緩やかに高まる傾向にあるように思われるが、安定した結果とはいえない状況である。このことの要因の一つとして、この集計にはカリキュラムの異なるすべての学部・学科の学生が含まれていることが挙げられるが、学科別に検討できるほどの回答が集まっていないという背景がある(参考として図 2-3-2 (次ページ) に学部ごとの回答者の GPA の分布を示す)。より安定した結果を得るには、より多くの回答を得られるよう、アンケートの内容や実施の方法に工夫が必要であろう。

図 2-3-2 学部ごとの回答者の GPA 分布



### 3. GPAによる群分けと回答内容の群間の差

#### 3-1. GPAの高低と各種時間の傾向

前項で言及したように、GPAは学部・学科によって平均等が異なり、一様な比較は難しい現状である。ここからは、回答者を学部ごとにGPA上位群（30%）、下位群（30%）、残りを中位群として分け、これをもとに特徴を検討することとしたい。

表 3-1-1 GPA群別の各種時間の平均値

	1.GPA上位群	2.GPA中位群	3.GPA下位群
人数	44	58	44
平均GPA	3.46	2.94	2.24
登録単位数(教職等を含む)	48.41	50.00	49.02
修得単位数(教職等を含む)	48.32	49.48	45.20
登校日数	5.38	5.40	5.41
出席時間(合計)	18.82	19.31	18.52
授業外学習時間(合計)	11.27	8.62	9.83
課外活動(合計)	5.33	6.34	6.75
個人学習時間(合計)	3.16	3.59	4.78
アルバイト時間	9.66	11.53	10.33
交友・趣味・娯楽	9.38	8.95	7.93
インターネットの閲覧	9.40	14.51	10.11
大学への通学時間	9.11	10.30	9.35
私的な生活時間	19.39	17.44	18.42
睡眠時間	46.20	42.18	44.23

※0時間は平均値の計算に含めていない

表では、主要な値の平均を群ごとに示している。念のため確認したところ、GPAについては上位群・中位群・下位群それぞれに統計的な差が見られた。しかし、他の多くの項目で統計的な差は見られなかった。差が見られたのは、修得単位数において下位群が他2群と比較して少ないこと、インターネットの閲覧時間において中位群が最も長く上位群はこれと比較して短いこと、睡眠時間において上位群が最も長く中位群はこれと比較して短いこと、の3点であった。修得単位数が下位群で低いことはGPAとのつながりを考えれば想像に難くないが、今回の上位群と中位群では差が見られなかったことから、上位群は単位を落とさずかつ比較的良い成績を取っていた群であり、中位群は単位は落とさなかったものの比較的成績が低かった群、下位群は単位も成績も多少落としてしまった群であるといえる。この他の差については、解釈が難しいように思われた。

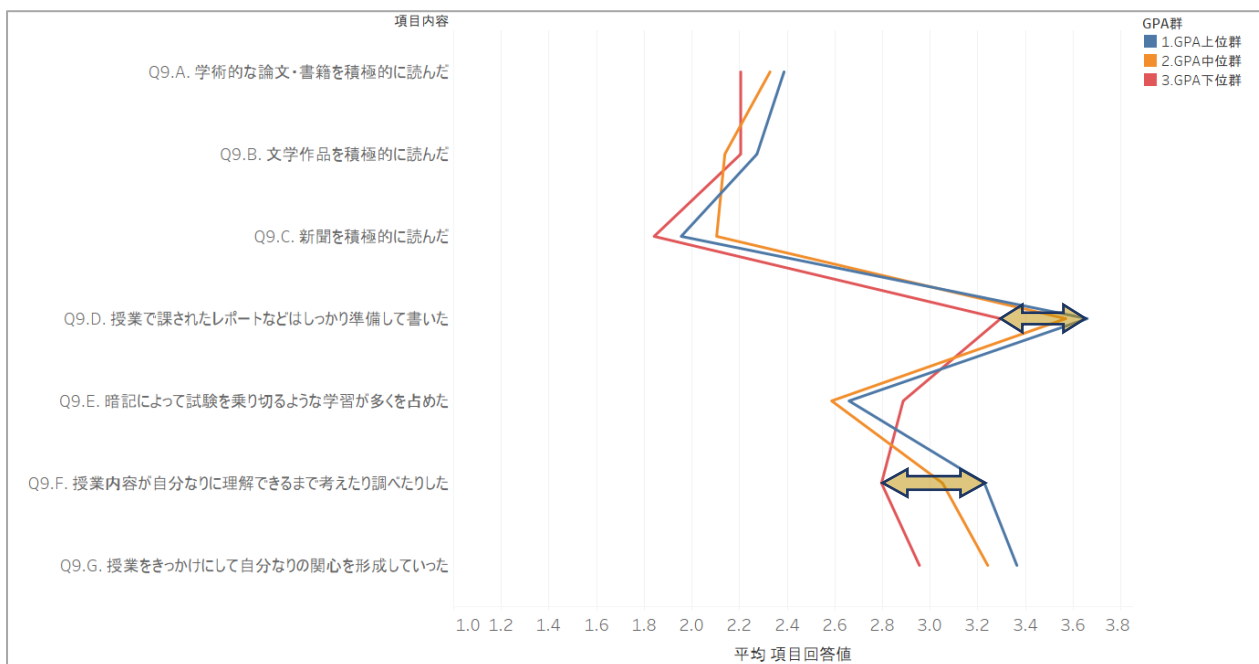
現状の結果から考えると、全学的な視点からは、GPAが高い学生の学習時間等に関する特徴はほとんど見られなかったといえるだろう。冒頭にも述べたように回答者が比較的GPAが高い学生に偏っていることから、時間の使い方等について同様の傾向がある学生の集まりであることを確認した形となった。



### 3-2. GPA の高低と学び方

本調査の Q9 では、1年間の学び方について、7項目で尋ねている。これらの各項目で、GPA 上位・中位・下位群間に違いが見られるかを検討した。

図 3-2-1 GPA 群別の学び方の項目への回答平均値



結果として、以下の通り群間の差が見られた。

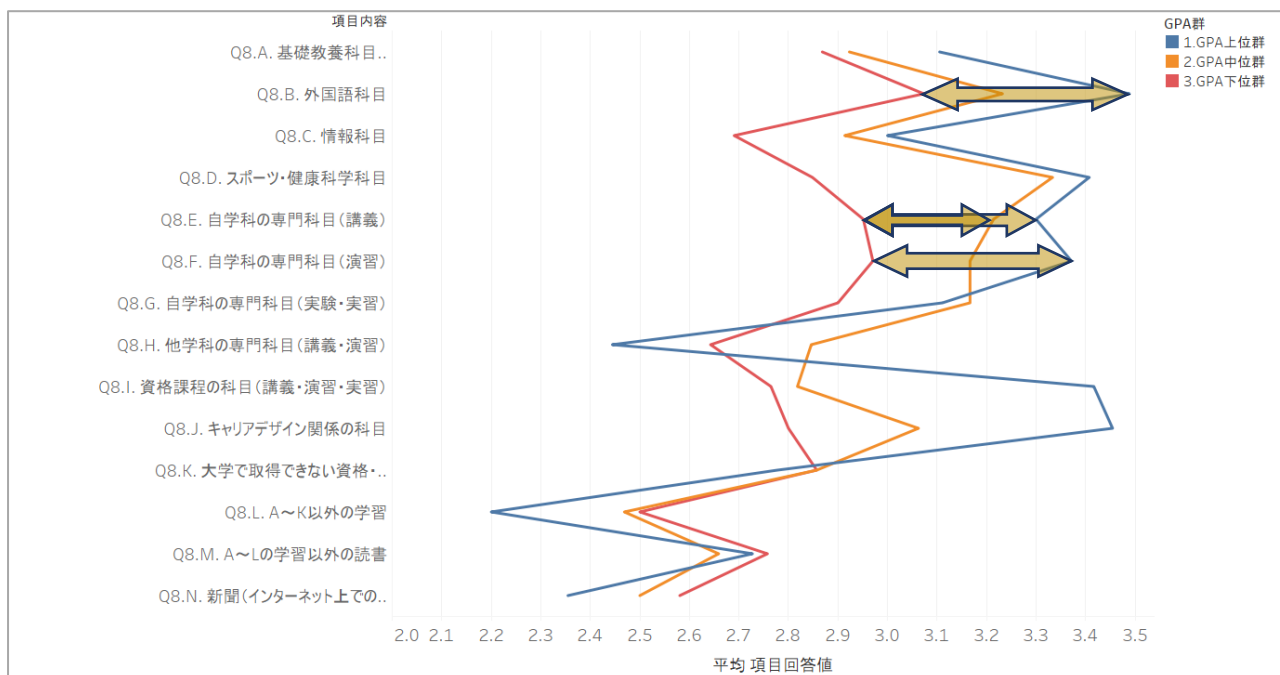
- ・「D. 授業で課されたレポートなどはしっかり準備して書いた」において、上位・中位 2 群の方が下位群より平均値が高かった（上位・中位間の差は見られなかった）。
- ・「F. 授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりした」において、上位群の方が下位群よりも平均値が高かった（上位・中位間及び中位・下位間の差は見られなかった）。

これらのことから、まず GPA 下位群は課題に対して自分でもそこまでしっかりと準備して取り組んだと認識していないことがわかり、このような努力は GPA と関係していることが明らかになった。また、授業内容が自分なりに理解できるまで考えたり調べたりする学習においても、GPA 上位群と下位群で差が見られることから、GPA 上位群はこういった行動をしてきたという比較的高い自信を持っていることがうかがえる。

### 3-3. GPA の高低と授業科目・学習関連行動の意欲

本調査では、Q8 において、1年間の各種の授業科目や学習行動に対する意欲の程度を尋ねている。本項では、これらの回答が GPA の高低による群と関連があるかを見ていく。

図 3-3-1 GPA 群別の授業・学習関連項目への回答平均値



※「0. 経験しなかった」回答は平均値の計算に含めていない

本設問には「0. 経験しなかった」の選択肢が設定されているが、経験率（「0」以外の回答であった者の割合）には群間の差はみられなかった。平均値において、群間の差が見られたのは、以下の内容であった。

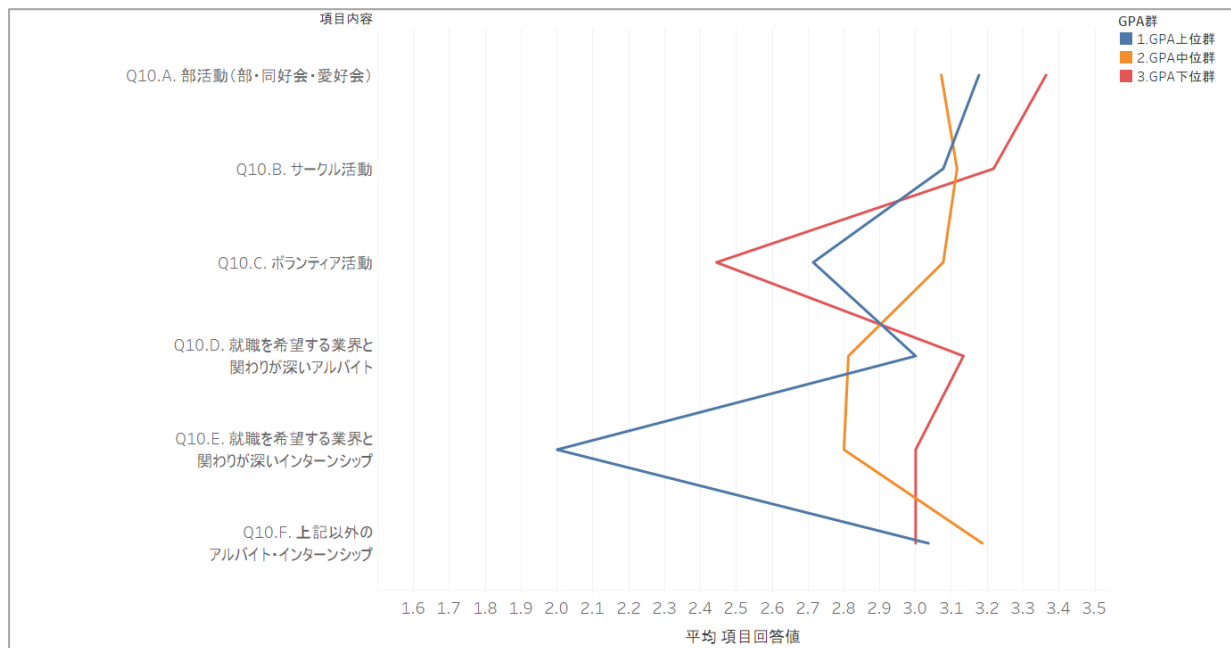
- ・「B. 外国語科目」において、GPA 上位群の方が下位群よりも平均値が高かった。
- ・「E. 自学科の専門科目（講義）」において、上位・中位2群の方が下位群より平均値が高かった（上位・中位間の差は見られなかった）。
- ・「F. 自学科の専門科目（演習）」において、上位群のほうが下位群よりも平均値が高かった（上位・中位間及び中位・下位間の差は見られなかった）。

これらのことから、GPA の上位群と下位群の間で外国語科目、自学科の専門科目の講義・演習については、意欲の自己評価と GPA が連動していることが明らかになった。分析対象が1年生であることを併せて検討すると、外国語科目や自学科の講義・演習はいずれも履修計画上主要な科目であると考えられるため、GPA が高かった学生の多くはこれらに対して意欲高く取り組んでいたことがうかがえる。

### 3-4. GPA の高低と課外活動等への意欲

本調査では、Q10 において、1 年間の各種の課外活動やアルバイト等に対する意欲の程度を尋ねている。本項では、これらの回答が GPA の高低による群と関連があるかを見ていく。

図 3-4-1 GPA 群別の課外活動関連項目への回答平均値



※「0. 経験しなかった」回答は平均値の計算に含めていない

各種の課外活動に関しては、経験している人数が少ない項目もある（経験者の割合は表 3-4-1 参照）が、GPA 群による経験者率の偏りは見受けられなかった。課外活動等への意欲に関しても、群間に違いは見られなかった。

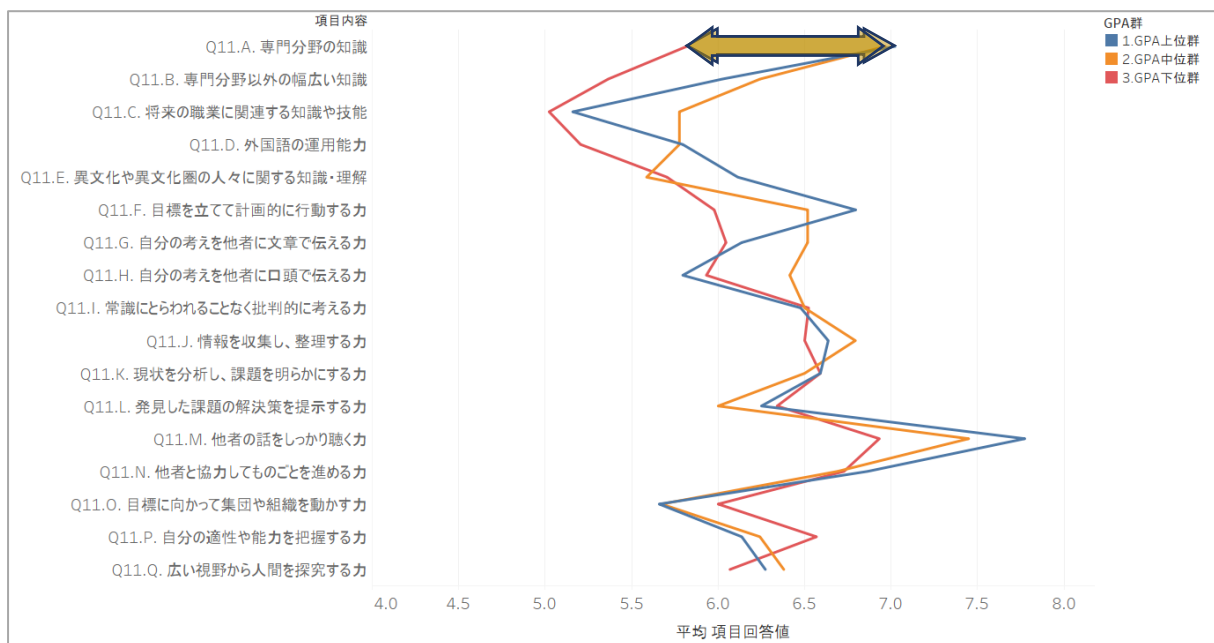
表 3-4-1 各課外活動に関する経験者率

	GPA上位群	GPA中位群	GPA下位群
Q10.A. 部活動(部・同好会・愛好会)	38.6%	48.3%	50.0%
Q10.B. サークル活動	59.1%	44.8%	52.3%
Q10.C. ボランティア活動	15.9%	22.4%	20.5%
Q10.D. 就職を希望する業界と関わりが深いアルバイト	25.0%	27.6%	34.1%
Q10.E. 就職を希望する業界と関わりが深いインターンシップ	4.5%	8.6%	9.1%
Q10.F. 上記以外のアルバイト・インターンシップ	63.6%	74.1%	50.0%

### 3-5. 知識・能力の学修実感と GPA

本項では、Q11 において尋ねた知識・能力の学修実感の各項目への回答が、GPA の高低による群と関連があるかを見ていく。

図 3-5-1 GPA 群別の課外活動関連項目への回答平均値



結果として、群間の差が見られたのは、「A. 専門分野の知識」についてのみで、上位・中位2群の平均値が下位群より高かった。したがって、GPA の高低と学修実感との連動が見られたのは専門分野の知識のみで、GPA 上位群・中位群は、下位群よりも高く専門分野の知識が身についたという実感を得ているといえる。

取り組み意欲 (3-3.) とのつながりで見ると、GPA 上位・中位群は自学科の専門科目 (講義) において下位群よりも有意に意欲的だったと回答しており、この結果と連動している。自学科の専門分野に関しては、意欲的に取り組んだ結果が学修実感にも結びついているといえよう。

### 3-6. まとめ

以上、回答した学生の GPA データをもとに学部別に上位・中位・下位に群分けし、その群によって在学調査の回答に違いがあるかを検討してきた。結果として、学習時間には大きな違いが見られなかったが、一部の学び方や外国語科目・専門科目に対する意欲、専門知識の学修実感に関しては、GPA 上位群と下位群で差が見られた結果となった。GPA が上位の学生は、自分の学び方について、レポートの作成や授業内容を理解するための努力についてしっかり行っていると自負していたり、外国語科目や専門科目にも意欲的に取り組んだと認識できたりしている。逆に、GPA が下位の学生は、実態がどうあれそういった自信は持っていないようである。

また、今回の結果からは、課外活動やアルバイトなどへの時間や意欲が GPA 上位・中位・下位群で差がないことも見えてきた。GPA が上位の学生も各種の課外活動に取り組んでいるし、こういった学業以外の活動が大学での学習活動を阻害してはいない現状がうかがえる。

なお、これらの特徴は本調査に回答した学生における特徴であることは留意する必要がある。そもそも回答した学生は、回答していない学生に比較して GPA が高く、修得単位数の平均を見ても履修状況に大きなつまづきがない学生が主である。回答する学生が増えれば、学科別の検討なども可能になり、また、学び方や意欲に違いが現れることも考えられる。今後も、回答数を増やすことを目指して、アンケートの内容や実施方法の改善を行っていく。